

# 最終課題：まちの特徴とまちづくり

政策・メディア研究科 修士1年 遠藤 忍 (81124262 / enshino@sfc.keio.ac.jp)

## はじめに

地形図と地図だけを見る教室環境を飛び出して、実際に街に出てみると、違ったことが分かってくる。地形図と地図以外の情報を照らし合わせてみると、違ったことが分かってくる。社会科という教科における地理学習は、単なる地図とのにらめっこを超えて、複数の資料と実際上の土地を見ることによってこそ、はじめて身になるものとして結実すると言えよう。社会科の教員としては、その資料の読み取りを生徒に体験させること、そして実際の「まち」の見方のバリエーションを与えることが、地理を担当するうえでの重要な要素ではないだろうか。

今回の最終課題では、1) 人口統計からランクサイズルールを割り出しその特徴を考察するというもの、2) 課題図書をもとに、東京の都市開発の様相を実際の街に出て体感するというもの、が出題された。資料を組み合わせる、実際に街に出る、その体験を自分で積むことによって、「まち」の特徴を考察する視座を得た。最初から結論めいたことを述べるとすれば、この最終課題で取り組んだ方法論を、生徒に体験させることが、教職科目としてこの授業をとった本当の意味になるのかもしれない。

## 第1部：ランクサイズルールから見た茨城県

この部では、H22年・H17年・H12年の国勢調査による、茨城県の市部の人口トップ10を表にしてまとめ、順位規模法則による表・グラフと照らし合わせて、茨城県の市部の特徴を考察するものである。なお、出典データはすべて、茨城県の統計局がインターネットに公開しているものに則った。

### 茨城県の人口と順位規模

本講義の授業資料によれば、順位規模法則とは、都市の人口順位とその都市の規模の関係を表した法則であり、両者の積は一定である、というものである。順位規模に対して、実際の人口規模がどのようになっているかを見ることによって、都市の特徴を判断できる、というものである。

それでは、実際に茨城県の市部における人口トップ10と順位規模はどのようになっているだろうか。まずは、表1.1を概観したい。

表1.1	H22			H17			H12		
	都市	都市人口	順位規模	都市	都市人口	順位規模	都市	都市人口	順位規模
1	水戸市	268,818	268,818	水戸市	262,603	262,603	水戸市	261,562	261,562
2	つくば市	214,660	134,409	つくば市	200,528	131,302	日立市	206,589	130,781
3	日立市	193,129	89,606	日立市	199,218	87,534	つくば市	191,814	87,187
4	ひたちなか市	157,012	67,205	ひたちなか市	153,639	65,651	ひたちなか市	151,673	65,391
5	土浦市	143,023	53,764	古河市	145,265	52,521	古河市	146,452	52,312
6	古河市	142,973	44,803	土浦市	135,058	43,767	土浦市	134,702	43,594
7	取手市	109,625	38,403	筑西市	112,581	37,515	筑西市	116,120	37,366
8	筑西市	108,518	33,602	取手市	111,327	32,825	取手市	115,993	32,695
9	神栖市	94,823	29,869	神栖市	91,867	29,178	神栖市	87,626	29,062
10	牛久市	81,684	26,882	石岡市	81,887	26,260	石岡市	83,119	26,156

表1.1は、過去3回の国勢調査に基づいた計算である。順位規模の値は、都市人口順位第1位(水戸市)の人口を、該当する都市の順位(例えばH22つくば市ならば2)で割った数である。H22年と、H17年・12年の違いは、第10位の都市が入れ替わっているだけであり、それ以外の都市は変わらない。では、この都市人口と順位規模とをグラフに表すとどうなるだろうか。対数化した上で図1.2-1.4に表した。

図1.2 H22年・茨城県人口統計 上位10市

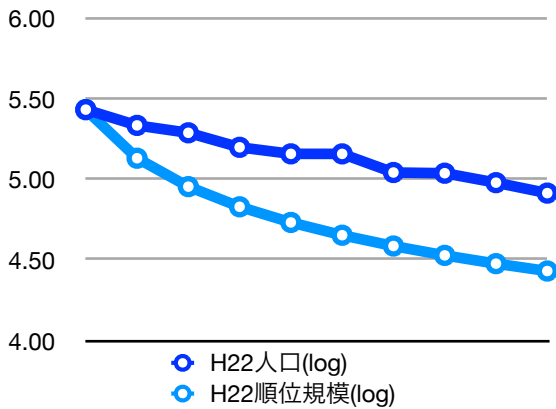


図1.3 H17年・茨城県人口統計 上位10市

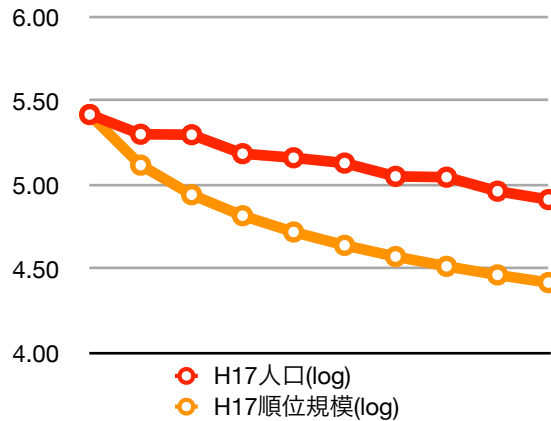
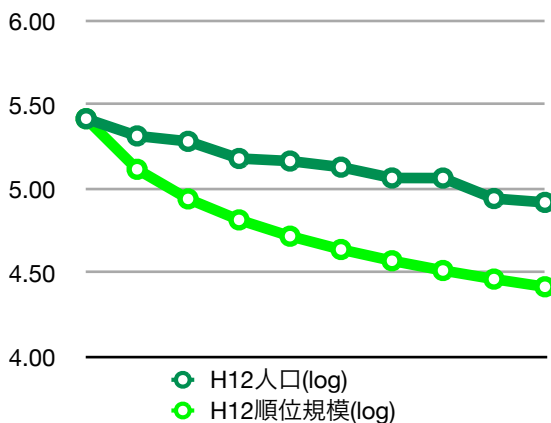


図1.4 H12年・茨城県人口統計 上位10市



これらの図に共通しているのは、色が薄い方の順位規模のグラフの線に対して、実際の人口のグラフの線がそれを上回っているということである。授業の資料によれば、この実際上の線は、Binary Patternを描いていると言える。つまり、先進国に多く見られる、分散型都市であるということだ。しかも、順位規模の値と実際の人口の値の乖離が、順位を下げるごとに広まり第5位以下は一定になっていると言える。これを言い換えれば、茨城県は少なくとも、都市部の一極集中型の県ではない、ということだ。

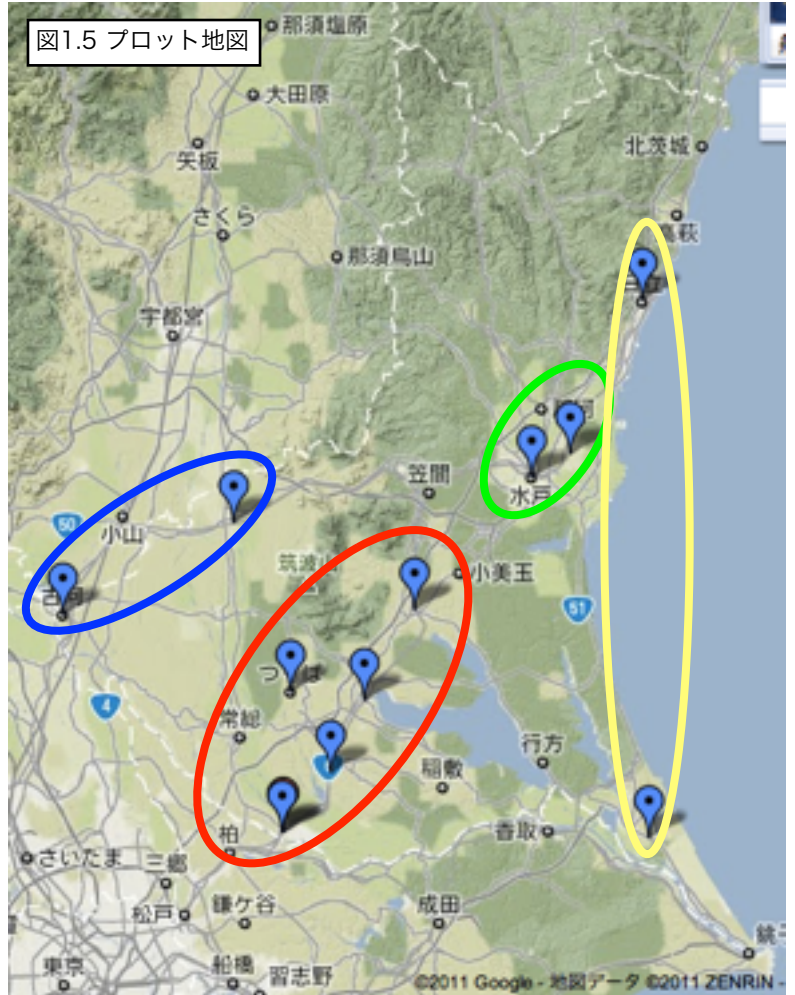
ではなぜ、茨城県の人口は分散型をとるのであろうか。分散的に人口がばらけるのには、理由があるのだろうか。

### 地図から考察する、分散の理由

今後は、これの上位10都市(正確には、牛久と石岡を含む11都市)をマップにプロットして検討して見たいと思う。Google Mapを使用して、この上位都市をプロットしてみると、ある程度地域にばらけることが理解できる。固まりでいうと、4つの場所があらわれる。1つ目は青色：県西地区(古河・筑西)、2つ目は赤色：県南地区(つくば・土浦・取手・牛久・石岡)、3つ目は緑色：県央地区(水戸・ひたちなか)、最後は場所をまたぐが黄色：臨海地区(日立・神栖)の4つである。

なぜ人は茨城県に分散して住むのか。なぜ「市」として成立するだけの人口を分散的に保てるのだろうか。このことについての理由が、4つに分けた地域でそれぞれ考察されるはずだ。これは筆者が茨城県民であるからこそその考察であることを付記しておく。

図1.5 プロット地図



まず、青色地域に関する考察から。古河市(筆者の出身地)および隣の筑西市は、結論から言うと、栃木方面につながる交通の通過点であり、その意味で首都圏近郊であるため人が住むと考えられる。古河は国道4号線が通っており、一方筑西市はそれとぶつかる国道50号が通っている。その意味で、交通の要所であり、首都圏内である。首都圏近郊生活圏として発展しているということが伺える。

次に、赤色地域に関する考察である。この近辺も、青色地域と同様に、首都圏近郊のベッドタウンとしての要素が強いと言える。この地域の場合、その都市近郊生活を支えているのは、JR常磐線とつくばエクスプレスであろう。つくば市については、戦後の学園都市としての計画性がある点で、常磐線沿線とは多少異なる要因で人口を増やしてきたと予測できる。しかし、TXが開業して以降は、つくばを含めた赤色範囲は東京の近郊都市としての役割を果たしていると考えられることが出来よう。

緑色の水戸周辺地域。ここは、とりもなおさず、元々水戸藩があったことによって長らく県庁所在地として在ったことが人口を多く保っている理由であると考えられる。地方都市としての役割を、特に行政的に保ってきたことが伺える。また、人が住む土地、という観点からすると、地形の色が分かる図1.5を見ると分かるが、水戸・ひたちなかは、周囲の高台に比して低いと言う点も、人が住むのに最適だったということが考えられるのではないだろうか。

最後に黄色の地域、そしてここにはひたちなかも含まれると考えられるが、この地域が市として保たれる理由は、第二次産業の影響が強いと考える。つまり、工場労働者が住む市であるということが予測できる。日立には日立製作所があり、神栖の隣である鹿島には住友重工業があった(鹿島アントラーズはもともと住友重工のサッカー部が前身)。この、臨界工業地帯に勤める人々が、交通的にも不便であるはずの日立・神栖という茨城の端部の人口を支える大きな要因なのではないだろうか。

当然、平成の大合併によって合併がなされることで飛躍的に人口を増やした地域がないわけではなく、その他にも考慮すべき点があり、それを見落として議論をするべきでないことは理解している。しかし、茨城県の人口が、水戸やつくばの一極集中ではなく、分散性をもって広がっていることの要因には、少なくとも3つの顔、すなわち、都市近郊としての茨城、歴史的な都市としての茨城、臨界工業地帯としての茨城、という顔が挙げられると考察する。

## 第2部：まちづくりを歩く～テーマ性と暴力性～

この部では、都市を計画し再構築するという経済的で人間的で地理的な営みについて、実際に都市計画が施された場所に出向いた結果を踏まえて考察を展開する。論の途中では、汐留地区でのフィールドワークで撮影した3枚の写真を用いた考察を行う。なおこの部では、課題図書である『新・都市論 TOKYO』(隈研吾・清野由美, 2008)を踏まえた上で、論を展開する。

### まちづくりと「テーマ」

第1部で挙げたつくば市は、筑波大学をはじめとするつくば研究学園都市の計画と実施によって大いに発展した場所である。そこには、「研究学園」というテーマが存在しており、研究学園都市はさながらテーマパークである。ディズニーランドのテーマ性は、中と外でくっきりを区別されている。つくばエクスプレスに乗って、つくば駅方面に向かうと、のどかな田園風景からトンネルをくぐり、そして研究学園都市に至る、これもディズニーランドのテーマ性と似ていると言えるのではないだろうか。都市計画のもとに再開発される土地には、そうしたテーマ性があることは、隈(2008)が述べていた通りである。特に、隈・清野(2008)が歩いた街は、再開発としての色合いとテーマパークとしての色合いを持つ場所であったように思う。汐留・シオサイト、丸の内、六本木ヒルズは、規制にがんじがらめにされながらも、どこかテーマ性を持った再開発であったというふう思う。もちろん、代官山ヒルサイドテラスも、町田も、テーマ性が存在していると言えよう。

いや、その「テーマ」という言葉は誤解を生むであろう。私がここで示したいことは、まちづくり・都市計画に携わる人々は、何らかのテーマやイメージを持っている、ということである。隈・清野(2008)がダイアログのなかで描き出したのは、静的な「土地」や「建物」としての街ではなく、動的

なものとしての街だったと考える。土地の「柄」「イメージ」「経済的側面」、建物の「デザイン」「見た目」、そして都市開発に携わる人々の「動機」「執念」「都合」。都市計画には、そういった事柄が深く絡んでいる。まちづくりは、テーマを持ったアートであり、その結果として出来た街にはどこかブランド的なイメージが付く。容積率の規制に対してどうアプローチし、そのなかで空間をどうデザインしていくか。それは建築家だけの仕事ではないが、しかし空間としてのまちを造り出す一番の担い手はデベロッパであるということもまた、隈・清野(2008)を読んで考えたことである。デベロッパが、その街をどう捉え、どんなセンスのもとに再開発をするか。それは、出来上がった街そのものだけでなく、その周辺の街並、そしてそこに集う人を左右してしまうものとなる。

## 暴力的に見えるまちづくり

だからこそ、デベロッパの視座とセンスと執念によっては、まちづくりのプロジェクトが大いなる暴力性を持ってしまうのだと思う。隈(2008)もまちづくりが暴力的であるというようなことを述べている。筆者はここで、暴力性という言葉、痛々しい・痛めつけられる思いがする、と捉えている。

そもそも、まちづくりが暴力性を持つには、幾つかの側面があると言える。たとえば、先程述べた街のブランドイメージ化も、ある意味では暴力的なものである。ドンとひとつの街ができあがり、それによってできあがる街のイメージは、旧来のその地域のイメージと大いに変わってしまう可能性がある。隈・清野(2008)が歩いた中では、六本木ヒルズがその例であると言えるのではないか。六本木ヒルズはブランドイメージの暴力性だけでなく、経済の暴力的側面も同じく持ってきたといえる。地上げ、そして定着したヒルズ族的なイメージが、経済的側面における暴力性だと考えている。

いま一つ、まちづくりがはらむ暴力性は、景観の無理矢理さとその土地特有の「色・柄・匂い」の捨象ではないか。その点で、町田という場所が都市論のなかで展開されるのは非常に面白い。町田が持つ独特の「色・柄・匂い」は、生の人間の生活がにじみ出ている刺激的なものだと見える。「色・柄・匂い」という点では、代官山の裏通りも同じような要素を持っている。どこかノスタルジーにかられる、決して完全体ではなくまたみすばらしさを残す雰囲気、あるいは人間くささ、それこそが動的な存在としての「まち」の実態だったはずである。文中にも登場する千駄木や神楽坂エリアもこれに当てはまるであろう。かつて慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスで教鞭をとった建築家の伊藤滋氏は、2009年のSFCオープンリサーチフォーラムで、次のようなことを述べた。曰く、都市計画ではアーバンデザインをちゃんとやらなきゃいけない、そこでいうアーバンデザインっていうのは中野みたいのところだ、と。その人間くささこそが都市計画の肝なのだとすれば、それを消し去るような「コギレイサ」は、人間的な物を捨象する暴力装置として働くだろう。

## テーマ性の暴力が見える汐留

そしてもし、その「コギレイサ」が、全くテーマ性の中で語られなかったとしたら、言い換えれば、周囲の雰囲気合わない「コギレイサ」が突如として現れ、しかもその「コギレイサ」をよく見ると、テーマ的な統一感が全くとれていないとしたら。それほど無理矢理で痛々しくて違和感を覚えるものはないだろう。実際は、筆者自身はキレイなビルが好きだし、そうしたビルに対してあこがれをもつことが多い。事実、汐留再開発地区は、日テレにしる電通にしる、整然としたキレイなビルが立ち並ぶ、あこがれの場所である。しかし、隈・清野(2008)は、ダイアログの出発点としての汐留において、街全体としての汐留をかなり悪く評していた印象を持っている。そしてその視点をもった上で街を歩いたせいだろうか、前に述べた、都市の再開発の暴力性のみが目についてしまった。

汐留シオサイトは、もともとJRの貨物操車場であったかなり広い土地を再開発した都市である。再開発は、まちづくりというよりも区画整理事業として位置づけられている。汐留地区の区画整理はかなり広範に広がっており、これは歩いてみて理解したことだが、新橋駅近辺から浜松町駅付近までの長い距離に渡って再開発地域が広がっている。オフィスとしての高層ビルが立ち並び、低層部および地下通路にはレストランやショップ等を展開するビルが多い。日本テレビ、資生堂、電通、パナソニック電

工、日本通運、共同通信、ソフトバンク、凸版印刷などがオフィスを構えるオフィス街である一方、浜松町駅に向かって歩くと、高層マンションも数棟建っているのが特徴と言えるだろう。また、JRの高架を挟んで西側には、JRAの場外馬券施設を中心として、イタリア街という区画が整備されている。かなり広範に広がる汐留地区の再開発事業は、土地を分譲する形で行われてきており、未だに工事中の区分も存在している。

筆者は、新橋駅とゆりかもめを結ぶ遊歩道からそのままペDESTリアンデッキを歩き、電通本社、東京汐留ビル、日通本社ビルを通り、住宅のあるツインパーク周辺を通り浜松町駅にいたり、大門駅側からイタリア街に至り、そして日テレタワー、最後に旧新橋停車場へ至るルートをとった。そのフィールドワークを通じて汐留地区の再開発における、テーマ性の暴力とは、すでに述べた、1) 周囲の雰囲気と調和しない突然さと、2) 統一感のないテーマ上の無秩序さであると感じた。それを、写真を見ながら見ていきたい。

再開発された都市のキレイさ、キレイなものはキレイなままのイメージであって欲しい。しかし、そのせっかくのキレイさが、周囲の雰囲気と調和しないのであれば台無しである。写真2.1は、イタリア街で撮影したものである。それも、イタリア街の一番端からの写真だ。イタリア街のタイルは、歩道と車道の見分けがつかないほどの石畳になっている。それでさえ危ないと感じたが、それ以上に驚いたのは、図2.1の写真の光景を見たときである。これのどこがイタリアなのだろうか。確かに、この写真の背の部分はイタリアのような雰囲気であったのは認めるが、ここまでテーマの内と外の境目が近いところにあるとは思わなかった。ディズニーランドとつくば研究学園都市に見られる、テーマ性の内にいる感覚からすれば、このいかにも日本の感じが残る光景には、心が萎えてしまった。これこそ、テーマ性の暴力である。テーマ性の内側から見て、境目のすぐ近くに外の世界を見ることが出来るしまうのは、外が内に対して暴力を働きかけており、一方外側から見ると、突如として現れた「イタリア」というテーマは、それまでの文脈を持っていた土地からすれば、凶器でしかないと考えられよう。



周囲の雰囲気との調和、そして中における雰囲気の一貫性が見られないという点では、写真2.2の光景も印象的である。この写真は、浜松町・文化放送社屋前付近から撮影した、シオサイトのオフィスビル群の写真である。隈・清野(2008)では、「羊羹を立てた」と言われている高層ビルたちは、その概観がどれもまるで違う。隈(2008)が述べる通り、個々のビルのデザインは非常に素晴らしい。特に、空に向かって刃を向くかのような電通本社は圧巻であるし、資生堂本社の暖かみ、そして日テレの構造体の曲線に素晴らしさを感じる。そうした筆者の好みのビル群たちも、よくよく見ると、どれ一つをとっても、色味や形を含めた、テーマ性の共有が全くなされていないことに気付く。銀と黒と茶色と緑と白と、色味がまったく違う。少しはそれらの統一が図られても良かったのではないかと思うのは、清野(2008)が「歩いていてつまらない」と述べるのが理解できるようなのである。そしてこの写真は、ビルたちの外観の違いを示すだけではなく、手前側の、古さを感じさせる情景との対比において、どこか違和感を持った筆者の印象を表出している。内部統一性のない「再開発」というテーマ性を持った土地と、その手前に存在する、以前からあ

2011春 地理学概論 最終課題：まちの特徴とまちづくり 政・メ 修士1年 遠藤 忍 (81124262) p.5

る街並との境目が不自然であることは、先程述べた通り、外は内に対して、内は外に対して、それぞれ暴力性を働かせていると考えることが出来る。

では、このテーマ性の暴力、とりわけ内部での不統一感から生じる不自然さはどこからくるのか。その解は非常に明確である。つまりこの再開発が、区画整理として分譲という形をとって行われた点に尽きる。それぞれの分譲区域の統一感が取れないのは、デベロッパが違うからに他ならない。図2.3は、何の変哲もないペDESTリアンデッキの足下の写真であるが、手前側の茶色は電通本社ビルから延びるペDESTリアンデッキの床、奥の白い方は東京汐留タワーから延びるものである。この写真で語りたいことは、内部における自然さ・統制のなさということである。デベロッパが違えば、ペDESTリアンデッキの境目でさえもここまではっきりと理解できてしまうことが驚きだった。私有地を広場として開放し、その分建物の容積率を稼いでいる建物および敷地には、その広場が都市計画法に基づいて通行人も利用できるようにしていることを示す看板を設置している。その看板のどれも、施主が異なっているという異様な光景が見られた。もちろん、各区画を、それぞれ別のテーマを持ったものとして捉え



ることは可能であろう。しかし残念なことに、テーマ性を感じることが出来る区画は、あのイタリア街だけであり、それ以外の区画には、共通したコンセプトなりテーマを見出すことが難しかった。

### デベロッパたちの心持ち

三菱地所、朝倉不動産がもつ「余裕」と、森ビルの「執念」。街をまちごとまちづくりする、これらのデベロッパたちの心持ちというのに比して、汐留・シオサイトにおいては、デベロッパたちの心持ちを見出すことが難しかった。もともとの汐留らしさとは、何だったのだろうか。新しい汐留らしさとは、何だったのだろうか。新橋停車場だけでは、過去の汐留らしさを残すことは難しいだろうし、区画ごとに違うイメージだけでは、汐留のイメージは単なるオフィス街としての認識にとどまってしまう可能性がある。

都市は、静的な土地だけでなく、動的な要素をたぶんに含むものだと考える。地名は、単なる名前としての地名以上のものを含んで、人々に対して印象づけられるだろう。まちづくりは、当然地形的な要素だけで動くわけではなく、経済的な要因を多分にはらんでいる。しかしその経済性の優先が、街の「色・柄・匂い」を捨象してしまうと、人は何に基づいて街の印象を判断してよいか分からなくなる。その例としての汐留の街並は、一つひとつの建物と空間をデザインし作り上げた建築家・施行者たちの努力とセンスを、集合的に見て台無しにしているように思えた。一つひとつではなく、集合として街を捉え、そうして出来上がった街並がもたらす様々な要素も含めてどうデザイン・再配置していくか、それはまちづくりに携わる大きなアクターとしてのデベロッパに求められる使命ではなからうか。